

出雲地区

# 保護司会だより

## 第28号

### 生活困窮者支援など、広がる市社協の役割

出雲市社会福祉協議会 会長

渡部 英二



保護司会のみなさんには日ごろからいろいろとご協力をいただいています。一年前には、社会福祉センター三階を改修し、その一角に保護司会のサポートセンターおよび事務局に入ってもらったようにしました。出雲市社会福祉協議会が進めているいろいろな取組において、保護司会や民生委員協議会などとの協力関係がますます重要になってきているからです。

出雲市社会福祉協議会(以下「市社協」とします)は、市が直接実施できないことを市に代わって行う、あるいは、公的制度では対応できない重要な問題などに対応するなど、さまざまな業務を担っており、その役割は年々広

がっています。以下、主な業務四項目について紹介しましょう。

一つ目は、近年とくに増加している生活困窮等に関する相談・支援です。最終的なセーフティネットとしては生活保護制度がありますが、それすべてが解決するわけではありません。市社協では平成二六年度に生活支援課を設置し、相談・支援にあたる専門職員を配置。昨年度には八百五十件の面談、二百四十件の訪問・同行支援、千二百件余の電話相談対応などを行なったところです。急な失業等によって生活が困難な状況になったような場合、その人が置かれている状況を十分に把握した上で、就労につなげると

いうような取組をしています。二つ目は権利擁護事業です。高齢や知的障害、精神障害等により判断能力が十分でなく、一人暮らし等のために家族のサポートが得られない場合は、金銭管理や契約など、日常的な支援がどうしても必要です。市社協では、権利擁護センターを開設し、現在では成年後見制度による支援を含め、百二十人余の利用者に対し日常的に支援活動を行なっています。

三つ目は高齢者あんしん支援センター事業。社会福祉士、保健師(看護師)、主任ケアマネージャー等の専門職員が、介護をはじめとする高齢者問題全般について市民からの相談を受け、助言や問題の解決に取り組んでいます。昨年度の相談件数は約八千五百件。非常に困難なケースへの対応も百件近くなっています。また、要介護までいかない軽度の人の重度化を予防する取組も重要で、昨年度は二万件近いケアマネジメントを行っています。四つ目は、支え合いの地域づくり。市社協に所属する九十人ほどの職員だけで、市内全域のさまざまな問題を発見し取り組むことは困難です。各地区の民生委員、地区社協などを中心に、地域で住民どうしが支え合う仕組みづくりと、専門的な関わりが必要なケースは市社協へ連絡してもらおう取組を進めています。またボランティア養成も重要であり、手話や点訳、音訳、要約筆記、傾聴など、多様な福祉ボランティアの養成に力を入れています。

このような事業を推進するためには、市民のみなさんの物心両面にわたる支援が欠かせません。市社協に対し、引き続きご理解とご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。



人はみな、生かされて生きてゆく。  
更生保護ネットワーク60周年

# 平成29年度 「社会を明るくする運動」

## 標語及び作文入選作品の紹介

出雲地区保護司会では「犯罪のない明るい街づくり」「青少年の非行防止」をアピールする標語を、一般の部、小・中学生の部（出雲市青少年育成市民会議との共催）として募集しました。一般は150点、小学生は568点、中学生は288点の応募がありました。

また、島根県社会を明るくする運動推進委員会が行った作文コンテストに協力し、小・中学校に参加を呼びかけたところ、小学生から128点、中学生から31点の応募がありました。

当保護司会で慎重に審査した結果、次のとおり決定しました。たくさんの応募をありがとうございました。

### 一般の部

#### 最優秀賞

立ち直る

君を励ます 支援の輪

芦渡町 石橋 厚

#### 優秀賞

思いやり

何時でも何処でも

誰にでも

大津町 児玉 節子

画面より

わが子に向けて

その視線

あいさつで

和む地域に

非行なし

武志町 築森 寛喜

守ろうよ

子供の笑顔は

地域の未来

あたたかい

大人の言葉が

子をのばす

#### 佳作

声かけよう

話しかけよう

わたしから

気を付けて！

心のサイン 見逃すな

多久町 常松 誠

あなたの手

きつと伝わる あたたかさ

平野町 福島世智子

人の和は

あいさつ信頼 ゆずり合い

斐川町 為石 光代

声掛けが

地域で出来る

セキユリティー

佐田町 田部 純子

ラインより

言葉ではつきり 顔をみて

大社町 藤原 裕美

交わすあいさつ

あふれる笑顔で

明るい地域

斐川町 大森 茂樹

ダメだよと

引き止めるのも

大人の仕事

多久町 常松由紀美

この耳で

しっかり聞こう 子の話

古志町 小玉 幸枝

優しさ

勇気をはぐくむ 我が郷土  
古志町 宮廻千代子

小学生の部

最優秀賞

やめようよ  
けんかもしじめも  
見ぬふりも  
北陽小学校 四年 福島 拓夢

優秀賞

一人じゃない  
みんながいるよ  
あなたには!  
灘分小学校 五年 石原 叶実

変わりたい

思う心を 行動に  
東小学校 六年 中島 紗希

佳作

友だちの  
いいところ見つける  
やさしい目  
大津小学校 三年 久保 丈也

大事だよ

あなたの命は ただひとつ  
大津小学校 五年 大森 星河

そのことば

ぼくもいやなら きみもいや  
長浜小学校 二年 小村 咲

一人じゃない

仲間がいるよと 伝えたい  
平田小学校 六年 多久和 夢萌

思いやり

いじめゼロへの 第一歩  
平田小学校 六年 中村 莉空

やめようね

チクチクことばは  
トゲだらけ  
東小学校 二年 曾田 凌央

ゆずりあい

あいてのこころも  
ピッカピカ  
東小学校 二年 岩淺 陽哲

そのゆう気

君がふみ出す 第一歩  
西野小学校 四年 青木 優奈

ありがとう

ひとつのこころに  
はながさく  
中部小学校 一年 本江 雄斗

笑顔の花

挨拶の水で 花咲かす  
中部小学校 六年 大野 菜々香

中学生の部

最優秀賞

友達に

レッドカード 出す勇気  
湖陵中学校 三年 今若 龍馬

優秀賞

僕たちは

みんな誰かの 宝物  
第一中学校 三年 米原 楓

人間は

スマホじゃなくて  
会話から  
浜山中学校 二年 川上 翔也

佳作

切らないで

つないでもらった  
命のバトン  
第一中学校 一年 藤澤 和陸

さしのべた

あなたのその手は  
魔法の手  
第一中学校 二年 内藤 春菜

創り出す!

笑顔の花と 仲間の輪  
第一中学校 三年 四方田 京子

守りたい

一人ひとりの 明るい笑顔  
第一中学校 三年 藤原 千愛

「だめだよ」と

言える仲こそ 友達だ  
第一中学校 三年 柘植 雄介

あいさつは

にっこり目を見て 自分から  
浜山中学校 一年 多久和 希里

見逃さない

傷つくあの子と その涙  
浜山中学校 三年 青木 莉紗

見るべきは

スマホじゃなくて  
相手の目  
浜山中学校 三年 安部 陸人

友達と

つなげていこう  
心のバトン  
南中学校 二年 青木 千奈留

助け合い 支え合い

差し出すその手で  
繋がる社会  
南中学校 三年 奥井 愛香

「社会を  
明るく  
する運動」  
**作文コンテスト優秀作品**

小学校の部 島根県保護司会連合会長賞

**広い心で**

出雲市立朝山小学校 六年 高橋 優子

高学年になり、テレビでニュース番組を見たり新聞を読んだりすることが多くなりました。そんな中で、犯罪に関する報道が多いことに気が付きました。私の身の回りでは想像もできないようなことが、日本のあちこちで起きています。なぜだろうと、どうしてこんなにたくさん悪いことをする人がいるのだろうと、私は不思議に思いました。そして、私なりに考えてみました。

今の時代はストレス社会と言われる、だれもがいろいろなストレスをかかえているようです。もしかしたら、犯罪や非行に走ってしまった人は、イライラを悪いことで発散しようとしたのではないのでしょうか。

私も、勉強でよくわからなかったり人間関係がうまくいかなかったりして、すこく落ち込んだことがありました。でも、それを母に話すことで、私は心が軽くなりました。母は私の話を否定せずに静かに聞いてくれ、「だいたいしょうが。またがんばればいいよ。」

と、励ましてくれました。母に自分の気持ちを分かってもらえたことで、心の中の重たいものがすっと消えていくような気がしました。このとき、母に話さなければ、母からこんな言葉をもらわなければ、何をしても私はだめだと投げやりな気持ちになっていたかもしれせん。

ストレスを感じても、身近に話を聞いてくれて、優しく励ましてくれる人がいれば、元氣になれます。困難に立ち向かう勇氣がわいてきます。周りにそんな人がいれば、もしかしら犯罪や非行に走らずに済んだ人もいたのではないのでしょうか。

犯罪のない明るい社会を築くには、人と人が顔を見て、直接話をするのがとても大事だと思います。ところが、最近は、けいたい電話やスマートフォンなどのふきゆうによって、そういう機会がどんどん減ってきています。このままでは認め合ったり励まし合ったりなど、温かい言葉をかけ合うことがなくなり、ますます心のあれた人が増えていくのではないかと、とても心配で

す。

また、犯罪を犯してしまった人の更生も重要だと思います。犯罪は許されるものではありません。でも、きちんと罪をつぐなつた人は一人の人間として、周りの人がへんけんをもちたずに接することが大事だと思います。せつかがんばつてやり直そうと思つても、自分を分かつてくれる人がいなければ、居場所がなくなつて、また犯罪につながつてしまふかもしれない。

一学期になつて、道徳で「銀のしょく台」という勉強をしました。刑期を終えたジャン・バルジャンに、町の人々はみんな冷たくあたります。そんな中で、ミリエル司教だけはジャンに食事をふるまい、ベッドを用意してくれました。それなのにジャンはミリエル司教を裏切り、教会の銀の食器をぬすみ出してまたつかまつてしまいました。ふつうならここで激怒すると思います。せつかく親切にしてあげたのに裏切るなんて、と悲しくなると思います。ところがミリエル司教はそんなことは一言も言わず、

「この銀のしょく台もあげたのに、忘れていきましたね。」

と言つたのです。私はおどろいてしまいました。そこで、いろいろ考えました。ミリエル司教は、ジャンに味方がいるということを知つてほしかつたのだと思います。自分を認めてくれる人がいてこそ人は変わることができる、と考へていたのだと思います。なんて心の

広い人なのでしょう。

さすがにジャンも、このときはかりは、この人にうそはつけない、この人を裏切つてはいけない、と思つたでしょう。きっとそれからジャンは、一生けん命働いて、正直に、幸せな人生を送つたと思います。

ミリエル司教のような人がたくさんいると犯罪を犯した人も立ち直ることができるのではないのでしょうか。

ミリエル司教のようになるのは、とても難しいことだと思います。私も実際に犯罪を犯した人に会つたら、たとえ罪をつくなつた後でも、やっぱりこわいと思うと思います。でも、それではまたその人を追いつめてしまいます。まずは勇氣を出して、あいさつをするところから始めたいと思います。そして、ミリエル司教のように、どんな人にも広い心で接することができるようになりたいと、強く願ひながら生きていきたいと思ひます。

●その他の入賞者

更生保護法人

島根保護観察協会理事賞

**向きあつ勇氣**

出雲市立鰐淵小学校 五年

野津 咲月

# 家族 中学校の部 山陰中央新報社賞

出雲市立斐川西中学校三年 藤澤 ほのか

家族とは、自分を支えてくれる一番のパートナーです。辛い時には悩みを分かち合い、楽しい時や嬉しい時は一緒に喜び合ったり、お互いに支え合えるのが、「家族」です。

私は、小学校低学年の時に、仲間外れにありました。その時は、毎日がとても嫌で、苦しさと辛さでいっぱいでした。毎朝、くすり、「学校に行きたくない」「何で学校なんかいかなきゃいけないの」と、ずっと叫んでいました。「どうして自分だけが」という思いでいっぱいだった私は、心に抱えきれなくなりました。思い切った母に本音をぶつけてみました。「母に何といわれるだろうか」と、母がどんなことを言つか、私は下を向きしていました。

母が語りだした言葉に、私は驚きました。母も、自分が小学生か中学生の時に、同じような経験があると言ったからです。当時の事をゆっくりと語り、母は私に「自分がされて嫌な事は、その人に直

接言った方がいいよ。」と言いました。私はそれを聞き、その通りだと思いました。一方で、自分が「やめて」と言ったら笑われるのではなにかという不安も感じました。しかし、「言わなければ何も変わらない、終わりはしない」と思い、数日後、勇気を振り絞り、相手にやめてほしいということを伝えました。

伝えた後は、それまでの事がまるで嘘のようになくなり、私達はともも仲良くなり、休日には皆で集まって遊ぶようにもなりました。その中で、私が何よりも嬉しかったのは、みんなが謝ってくれたことです。気持ちが通じたことが、安心にも繋がりました。その後は、隠し事をすることなく、言いたいことを言い合えるほど仲は深まりました。

あの時、母が私に自分の経験を話してくれなかったら、私は勇気を持てず、そのまま状況は変わりませんでした。私は、勇気を出すことで未来が変わることを知りました。ま

た、未来は、自分で変えていくものであることも学びました。だから、私は今、嫌な事があつた時には、メールやラインではなく、その人に直接言い、相手の気持ちを聞き、自分の思いも伝えるようにしています。

家族は、人生の先輩です。いつもそばで見守り、悩みにも真剣に耳と心を傾けてくれる私にとって必要不可欠な存在です。その家族が、いつも私を愛してくれていたことが分かるのが、リビングに置いてある幼い頃のビデオです。我が家には、このビデオが、たくさん残っているのです。

ある日、その中の一本を見ていると、懐かしさとともに、改めて家族の愛が伝わってきました。私が初めて何かできるようになったとき、満面の笑みで喜び、ほめてくれる姿が、いつもビデオの中に映し出されています。また、その家族の姿に、私が嬉しそうにしている姿も。いつも私のことを認めてくれて、ほめてくれた私はそのたびに、いろいろ成長してきたのだと感じました。両親は、私にとってその時に励みになるような言葉をたくさんかけてくれました。

私は、この十四年間たくさんこのとを学んできました。家族があつて

の自分であるということ、また、私が元気でいることが、もしかしたら家族にとつても支えや喜びに繋がっているのかもしれないということ、心を留めて生きていきたいと思えます。

また、私が自分の人生を変えられたように、言葉はとても強い力をもっていることも忘れてはいけません。たった一言で励みになり、嬉しい気持ちや、次へのやる気にもつなげてくれる言葉。しかし、使いつ方を間違えれば、相手を傷つけてしまうのも言葉です。私が家族からかけてもらったように、相手が幸せになる言葉を、私はこれから使っていくしたいと思います。

私が大事にしている言葉は、「日々前進」です。昨日よりも今日、今日よりも明日の自分が好きになれるよう、周りの人との関係を大切にしながら、生きていきたいと思えます。

## ●その他の入賞者

島根県BBS連盟会長賞

## 自分の壁

出雲市立斐川西中学校 三年

多々納璃咲

# 平成二十九年視察研修報告

保護司 坂本 美喜雄 (出雲地区保護司会)

六月十五日、出雲地区保護司会と更生保護女性会二十三名は大分刑務所の視察研修を行いました。大分刑務所の歴史は古く、明治四年に懲役場として設置されました。戦後、現在地への移転工事が始まり平成二十三年に全体の工事が完成しました。大分刑務所には年齢が二十六歳以上の男子で執行刑期十年未満の犯罪傾向が進んでいない者、執行刑期十年以上の犯罪傾向が進んでいない者、禁固受刑者及び未決拘禁者が収容されています。収容定員は約千四百人ですが、平成十九年の千五百七十五人



説明を聞く研修参加者

をピークに収容数は年々減少し、現在では未決二十五人、既決九百四十人、合計九百六十五人が収容されています。収容数の減少傾向は犯罪が減少していることに起因していると説明がありました。

刑務所は刑の執行を通して規則正しい生活習慣を習得させ、作業や個々の受刑者に応じた効果的な教育を実施し、出所後の社会生活をサポートし、健全で善良な市民として社会復帰をさせることを目的としています。受刑者は六時三十分の起床から始まり二十一時の就寝まで決められた生活の中で改善更生や社会復帰のためにいろいろな教育や指導を受けています。一般改善指導や特別改善指導が行われていますが、身上相談や法律相談、趣味の指導なども行われています。また、教科教育では国語、算数、社会など刑務所に入る以前に不足している学力を補うための教科指導も行われています。

刑期を終えて出所する者は刑務所の外での急激な社会的変化が大きな壁になっていると考えられます。「釈放前の指導」としてコンビニでの公共料金の支払いや荷物の受け取り、公共交通機関の利用、市役所での手続きなどを実際に体験する機会が設けられています。出所後の日常の生

活に戸惑いを感じないような配慮がなされていると感じました。

休日を除いて一日八時間の刑務作業の時間が設けられています。刑務作業は重刑者の矯正や社会復帰を図るための重要な方策の一つとして位置づけられています。

刑務作業の中には受刑者自身が摂る一日三食の食事を自分たちで炊事したり作業服などを洗濯したりする作業があります。受刑者は男性のみで構成されているので、社会生活の基本である炊事や清掃など自分の身の周りのことから身に付けていかなければならないと再認識させられました。

大分刑務所では昼と昼表は全国の刑務所で使用している昼を請け負っています。大分刑務所で昼や昼表の製作を行っていることは単に職業的な知識や技術を身に付けること以外に達成感や有用感を養うためには必要なことだと感じました。職業指導では溶接科、情報処理科、農業園芸科に加えビジネススキル科が新設されました。急速な情報化社会の変化に伴いスマホやパソコンの知識や技術、ネットワークの利用などは日常生活には不可欠なものとなっています。ビジネススキル科はパソコン



大分刑務所玄関にて

操作だけでなく、納品書や請求書等のビジネス文書の作成の知識や技術を習得するために設けられています。全体での概要説明の後、「木工」と「畳」の作業を見学させていただきました。受刑者が作業をしている中を足早にしか見て歩くことができませんでしたが、張り詰めた空気の中を緊張しながら見学させていただきました。

見学の後で全体的な質疑応答があり、その中で一番印象に残ったのは刑務所内での高齢化の問題です。刑期を終えるまでに介助や介護が必要な場合があります。そのような受刑者に対して今後どのように取り組んでいく必要があるかという問いに対して将来的には受刑者が介護士の資格を取り、受刑者同士で介護や介助をすることを考えていると回答がありました。高齢化や認知症などの対応については一般の社会同様に大きな問題であると感じました。

大分刑務所の職員の方々は「社会復帰」という目的に沿って日々努力をなされていると思います。保護司という立場で今回の大分刑務所の視察研修をさせていただきましたが、実際に刑務所を視察することによって責任の重さを感じました。今後も研修を通して研鑽を積み重ねていきたいと考えています。

# 誰だつてもう一度 やり直せるんだ!

保護司 榎野 博巳 (防犯予防部会)

平成二十九年七月三日、出雲市役所一階のくにびき大ホールにおいて第六十七回「社会を明るくする運動メッセージ」の伝達式と啓発講演会が開催されました。

教大阪弟子協会担任牧師の金沢泰裕様に「誰だつてもう一度やり直せるんだ」と題してお話をいただきました。

メッセージ伝達式のあいさつでは、昨年の十二月「再犯の防止等の推進に関する

先生は中学生時代から非行に走り、中学校入学と同時に地元の暴走族に入って暴走行為とシンナーに

法律」が成立・施行され、犯罪や非行をした人の立ち直りに向けた取り組みを強く推し進めるようお願いいただきました。



坂本保護司会会長から長岡市長へのメッセージの伝達

明け暮れ、二年で高校を中退。その後十八歳の時中学時代の仲間の紹介でヤクザの世界に飛び込み、飲む・打つ・買うに加え、覚せい剤をはじめとするあらゆる薬物に手を出し、警察の厄介者になったことも一度ならずあったそうです。

その告白に耳を傾け、「誰だつてもう一度やり直せるんだ」とのテーマについてどのようにお話になるか、保護司として立ち直りのヒントを得ようと真剣に聞き入りました。



講演中の金沢泰裕牧師

ご自身は、父親の死を機にイエス・キリストに出会い、罪を悔い改め、生き方を変えたと簡単におっしゃっていましたが、特に薬物に染まった対象者が立ち直るには並大抵の努力では立ち直ることができないことを講演の端々から感じました。

家庭内暴力、そして社会問題になっている薬物汚染といった難題を抱えた少年・少女たち、またその家族と交わりを持たせてもらっていることは、愚かな過去の経験を少しでも生かし、世の中のために役立てなさいとの神のお導きであると思われ、自分を振り返っておられました。

出雲地区保護司会だより 第二十八号

平成二十九年十二月一日発行

出雲地区保護司会

事務所：出雲市今市町五四三番地 電話22-71790

ちよっこし 話

「後悔 先にたたず」



私が高校生の頃のことですが、私の母は、毎日当たり前のように妹、弟たちの弁当も作って食卓の上に置いてくれました。

ある寒い日、母は前日から四十度近い熱を出し、「ゴホン、ゴホン」とひどい咳をしながら、台所で弁当を作っていました。明らかに具合悪そうな母の姿を見て、私が投げかけた言葉は「何やってんの？風邪がうつるじゃん！」でした。そんなことを言い、作ってくれた弁当を置き去りにしてしまいました。本気で言うつもりはなかったのですが、思春期だったせいかな私の口から出たのはそんな言葉でした。

それから半世紀が流れ、そんなことは忘れていましたが、今から十数年前にそのことを思い出すことになりました。それは母が亡くなった時、身内だけで母の前で思い出話をしていた時です。妹、弟が、「おふくろ

つて、毎日弁当作ってくれたよね」と切り出し、「今みたいに冷凍食品がなかったから、いつも朝から揚げ物とか、炒め物をしていたよね。何が好きだった？」と二人の会話を聞いて、あの日のことが思い出されました。

母と随分長く顔を合わせていたのに、「いつも弁当作ってくれてありがとう」も「あの時は、悪かったね」のことも、「ごめんね」の一言も言えずに、さよならをしてしまいました。残っているのは後悔だけですから。

だから、感謝の気持ちを伝えるときは、先に延ばさず「ありがとう」といい、謝らなきゃいけないときには、先に延ばさず「ごめんさい」を言おう。先に延ばした生き方は、いつか後悔します。大切なのは「今」です。(もうすぐ後期高齢者)



更生保護功勞受彰者

(平成二十九年)

瑞宝双光章

土井 一顕

法務大臣表彰

川本 龍祥 川上 清子

全国保護司連盟理事長表彰

園山 恵子

島根県知事感謝状

一ノ瀬隆男

中国地方更生保護委員会

委員長表彰

天野 良枝 園山 幸子  
市場 隆子 藤本 淨信  
朝山 一玄

中国地方保護司連盟

会長表彰

内部 康正 坂根 光紀  
橘 亮秀 野津 徳男

松江保護観察所長表彰

足立 眞司 花田久美子  
山上 太全 川上 雅文  
福田 緑

島根県保護司会連合会

会長表彰

石飛 博雄 神門 保雄  
中尾 亮 釜屋 治男  
米田 敬止

保護司の異動

◎退任

鐘築 伸正(出雲)

(平成二十九年七月三十一日付)

太田 佑子(出雲)

(平成二十九年十月十日付)

内部 康正(斐川)

(平成二十九年十一月三十日付)

◎新任

高見 睦哉(出雲)

花原 良治(出雲)

山田 信之(出雲)

吉田 啓修(出雲)

稲田 昌史(斐川)

(平成二十九年十二月一日付)

編集後記

色々な行事の多かったこの季節もいつの間にか初冬へと移ろっています。本号では社会福祉協議会の渡部会長様に巻頭言をいただきありがとうございます。

また、いつもの「杜明運動」にちなんだ内容に加えて、大分刑務所の視察研修報告を寄せていただきました。千人近い収容者に対しての特色ある指導内容が紹介されています。

全国各地にある矯正施設の受刑者が出所後どのような社会復帰をなし得るのでしょうか。北欧には社会復帰率が四十数%にも及ぶ国々があるそうですが、日本は二十%台だと言われています。この報告が支援の方法をそれぞれが考えるひとつのきっかけになれば幸いです。(川上清子)

\*この広報紙は、更生保護法人島根保護観察協会からの助成金を財源として発行しています。